

優秀賞

中学生部門

静岡県静岡市

国立静岡大学教育学部附属静岡中学校2年

渡辺 敦子

花の終わり

祖母は花を育てることが好きだ。祖母の家の庭には、菊や水仙、秋桜など、季節によって様々な花が咲いている。梅の木もあるため、春には梅の美しい紅梅色や、甘酸っぱいにおいを楽しむことができる。そんな色とりどりの祖母の庭を見て、感じることは私は幼いころから好きだった。

中学一年の夏休み、庭には夏なので朝顔の花がたくさん咲いていた。あいかわらず綺麗だったが、その中で枯れている朝顔が何本かある。祖母に「あの朝顔、枯れているね」と言うと、「朝顔は枯れる、ではなく、しぼむ、というんだよ」と祖母は言った。

「朝顔に限らず、花が終わる時の言い方は花によって違うんだよ。菊なら舞う、ぼたんなら崩れる。梅ならこぼれるという風に」

この言葉を聞いたとき、なんて言葉は美しいのだろうと思った。

今まで私は、花を見るもの、においを楽しむものとしか考えていなかった。しかし本当はそれだけではなく、花の状態を言葉で表すことも花の美しさを感じるために大切なことだったのである。

私達が普段何気なく使っている「桜が散る」という言葉もそうだ。単に終わっている、枯れているではなく「散る」という桜の様子を言葉にしている。そうして、桜の終わりぎわの美しさも感じとろうとする。

また言葉にすることで、花だけではなく言葉の美しさも私達の心に伝わってくるのだ。一つの言葉にまとめないで、花によって違う多種多様の終わり方を言葉にする。それは何百年も前からあった古来の言葉の文化である。その歴史は現在をもつなげる。そこにも言葉の美しさがあるのだ。

言葉は不思議な力を持っている。それは良いようにも悪いようにも、人に影響させる。私はそんな美しい言葉を、力によって影響させられた一人として、未来につなげたい。何百年も前の人達がつなげてきたように。